

ミステリ読書案内

2022. 10. 2 発行元

第402号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

阿津川辰海「入れ子細工の夜」

5月に光文社から出版されたもの。2年前に高い評価を受けた『透明人間は密室に潜む』の延長上に作られた短編集。「本格ミステリ」としての特徴をいろんな角度から実践して見せた。高レベルの仕上がり。

「本格ミステリ」の代表者

「本格ミステリ」で期待される若手作家の一人。たくさんの読書量に裏打ちされた実力者だと言えるだろう。この『ミステリ読書案内』では講談社タイガから出ている『紅蓮館の殺人』『蒼海館の殺人』を以前取り上げたが、今度は光文社から出た方を見てみようと思う。

下の囲みに取り上げた長編の『録音された誘拐』をトップに挙げようかとも考えたのだが、私としては短編集の『入れ子細工の夜』の方が切れ味が鋭くて楽しめたので、こちらを先に書くことにした。

各編にこだわりのある仕掛け

「本格ミステリ」としてのトリックの妙は短編の方がより際立つのかもしれない。本書には4編が収録されている。新型コロナウイルスによる社会の混乱も巧みにストーリーの中に取り入れている。

第一話の『危険な賭け』はハードボイルドの形で始まる。私立探偵・若槻晴海の名刺を取り出しての古書店の聞き込み。古書を買った男が、近くの喫茶店『香巫夢』で、カバンの取り違えに出会って、間違えた人物を探しているという。古書店の常連客かも…。

でも、この話、そんなに単純ではない。探す側にも、探される側にも裏の話が付け加えられているのだ。騙されないように。

「犯人当て」の大学入試

第二話。コロナ禍の影響もあって大学入試に新しい試み。K大学の小論文が「犯人当て」の問題に、という設定。参考文献が鮎川哲也の『薔薇荘殺人事件』『達也が嗤う』、高木彬光の『妖婦の宿』、クイーンの『オランダ靴の秘密』、綾辻行人の『鳴風荘事件』、有栖川有栖の『孤島パズル』という出題も笑いを誘う。

黒枠ページに問題編が載ってい

阿津川辰海・作品リスト

1. 名探偵は嘘をつかない
2. 星詠師の記憶
3. 紅蓮館の殺人
4. 透明人間は密室に潜む
5. 蒼海館の殺人
6. 入れ子細工の夜
7. 録音された誘拐

る。集まった解答がまた楽しい。まあいろんなことが考えられるよね。

ミステリ作家の苦しみ

第三話の『入れ子細工の夜』はミステリ作家の話。ある作家が自宅の書斎を開けると若い男がいた。新しい担当の編集者だという。作家は、自分の考えたトリックを実演して検証することになっているので、その編集者に手伝ってもらうことに。『四十一番目の密室』という作品。でも、ここから話は思いがけない方向に転じていく。二人の行動は次々と立場を入れ替えて…。

第四話の『六人の激昂するマスクマン』は、大学プロレス連合の総会の場面。活動停止状態からの復活を目指す話し合い。プロレスのフェイスマスクをしている上にコロナ対策のマスクをすると…。残念、もう紙面が尽きてしまった。

「録音された誘拐」

こちらは8月に光文社から出版された長編作品。「4冊連続刊行」と帯に記してある。活動が活発化しているのだろうか。『透明人間は密室に潜む』に収められていた『盗聴された殺人』に登場する私立探偵・山口美々香と大野紘所長を再度登場させたもの。今後シリーズ化されていくのだろうか。長編は長編でじっくり構想が練られていて、物語の進行に合わせた各段階で、思いがけない仕掛けが明らかになってくる。題名のとおり「音」を巡る発見が多い。

大野探偵事務所の所長・大野紘の家族が巻き込まれる誘拐事件。読み始める前に、目次の「現在」「その半年前」「その三か月前」…の意味を考えてしまってもちょっと混乱。また、本文に入って、視点がその都度移り変わっていくのも混乱の原因になったりする。誘拐犯罪者側のカミムラからの描写もあって、至る所に錯覚を生む仕掛けがある。それがどんでん返しにも結びついているので、読者は慌てずにゆっくり読み進めるのが良いかもしれない。大野紘自身が誘拐の被害者になる。犯人から家族に電話や録画でメッセージが届くのだが、そこから手掛かりを探すのは美々香の役目。彼女は特殊な才能の持ち主で、見逃してしまうような「音」も聞き分けて、そこから推理を展開し、次の捜査の道を切り開いてくれる。今回は、美々香の父親が病気になって、美々香自身も対応に苦しむ場面が出てくる。カミムラが仕掛けてくる落とし穴は新鮮味があって、「本格ミステリ」ファンを楽しませてくれるだろう。後半にも、次々に明らかになってくる新情報が設けてあり、真相の裏の真相にたどり着くまで翻弄される。少し複雑に作り過ぎている気もするけれども…。